

## 2020 年度 Galerie Aube 公募展

### 「うちなる時間の結晶なき混沌」

人間は自らの種を延命させるために過去様々な選択を強いられてきたが、COVID-19 の感染拡大に於いても、人的接触の禁止、外出禁止、都市封鎖、国交の制限まで選択は徐々に規模を広げていった。これらは生き延びるために自由より安全が優先された結果であり、選択であった。日本でも政府や自治体から「自粛」が要請され、自主的に引き籠もる時間が長く続いた。その経験は現在も個々の意識下に潜在しており、日常の行動を変更させるに至る。

一方で人間はタフである。状況を整理するように努め、先を予測し、状況に名前をつけ、未来のあるべき社会の姿をシミュレートする。「アフターコロナ」「with コロナ」「ソーシャルディスタンス」「おうち時間」等、危機に直面しながらも COVID-19 を消費しようとする強（したたか）さを兼ね備えている。「コロナは我々に何をもたらしたか」という総括的議論が各分野で日々行われ、オンラインコンテンツが充実していく。しかし誰がみても我々はまだ渦中にいる。

私たちはこの状況下で個々にどのような時間を過ごしているだろうか。何が変わり、何が変わらないのか。何を考え、何が考えられていないのか。何が炙り出され、何が忘却されているのか、何を恐れ、何に希望を見出しているのか。この状況を象徴し結論づける作品を集めるのではなく、この状況を考え続けるための作品を公募する。造形的、芸術的な方法によって今と未来を考えるために。

(文：高橋耕平／ギャルリ・オーブ運営委員／美術工芸学科)